漢詩鑑賞　　令和六年十一月　　　　　　　　　玉井幸久

僧院

虎溪閒月引相過　　の　いてぎ

帶雪松枝掛薜蘿　　をぶる　をく

無限靑山行欲盡　　の　くゆくきんとし

白雲深處老僧多　　き　し

【通釈】

　起句　かの東林寺の境内を流れる虎渓のような渓流を、静かに照る月影にみちび

　　　　　かれて渡れば、

　承句　雪をかぶった松の枝々にはつたかずらが垂れ下っている。

　転句　遠く限りなく続くとみえた山々も行くにつれて尽き、ようやく寺にたどり

　　　　　ついた。

　結句　白雲が深く立ちこめるこの寺には年老いた多くの高僧が修行しておられる

　　　　　のだ。

【語釈】

　僧院…寺。　寺院。

　虎溪…江西省廬山にある東林寺の前を流れる渓流。昔、晋の名僧がこの寺に

　　　　　住み自ら禁足の誓いを立てて、来客があっても虎渓を過ぎて見送ったこと

　　　　　はなかったが、ある日親友の陶淵明と陸修静が寺を訪れ辞去する時に慧遠

　　　　　は話に夢中になり思わず共に虎渓を渡ってしまい、気が付いた三人は顔を

　　　　　見あわせて大笑いしたという「虎渓三笑」の故事がある。

　閒月…静かに照る月。

　引　…引く。みちびく。

　帶雪…雪をおびる。雪をかぶる。

　薜蘿…マサキノカズラ　と　ツタカズラ。

　行　…ゆくゆく。　歩きながら。　進むにつれて。

　老僧…年老いた僧。

【押韻】

 平声　歌韻。過、蘿、多、

【解説】

　釋　靈一（七二七―七六二）は盛唐末期の僧。（浙江省）一説に廣陵（江蘇省）

　の人。　俗姓は呉。　浙江会稽山中の雲門寺、余杭の宜豐寺、揚州の慶雲寺等に住

　んだ。

　高徳の僧として弟子が多く、禅誦の間に多くの詩歌を賦し、劉長卿・張繼・皇甫曾

　・郎士元・嚴維・僧靈徹等と塵外の交わりを楽しんだ。　また山水を愛し浙東浙西

　の名山や名刹は悉く訪れたという。

　この詩は作者がさる名刹を訪れた時の作で、寺の前を流れる渓流を虎渓になぞら

　え、雲深い山中に在る僧院の模様と其処に住む高僧たちを訪れようとする自らの

　清らかな心情を言外に美しく詠じたた佳作です。

　なお、この詩を作者が廬山の僧院を訪れた時の作とし、実際に虎渓を渡ったという

　説もあります。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上